

「これなあに？」オタマジャクシとの出会い

岡崎市緑丘保育園（愛知県岡崎市）

[2 歳児]

保育士が近くの用水路で直径2ミリのカエルの卵を見つけ、子どもたちに見せようと考えた。飼育ケースに入れ、子どもたちが興味をもてるように見やすい所に置いた。初めて目にする卵に「これなあに？」と不思議に思ったり、感じたり、驚いたり、触れてみたりして、成長の変化にも興味をもてるようにしていきたいと考えた。

子どもの様子 / 保育者の投げかけ（保）

保育者の受け止め / 援助 *

カエルの卵の入っている飼育ケースを置いておく

登園してきた子から気付き、ケースを囲んでジーッと見ている。

保「これ何かね？」「黒いぶつぶつがいっぱいあるよ」

I 児「これ豆じゃないかな？」

S 児「アリかな？」

T 児「これザリガニの餌だ！」

O 児「おばけだー」

保「オバケかなあー。じゃあ静かにしておこう」



* 何の卵であるかは知らせず、子どもの表現する言葉、表情など反応を見ることにする。

* 興味をもてるように投げかけてみる。

子どもの感じ方になるほど思い観察力があることがわかった。「ザリガニの餌」とは、以前の経験から表現したと思われる。

思い思いの発想に共感し受け止め、「オバケ」というイメージを大切に接するようにしたいと考えた。

卵に触れてみる

保「トロトロしてるよ。触ってごらん」

T 児の指の間を、膜のような物がすり抜けた。

T 児「つるんってした！」と、少しびっくりした様子。

他児も乗せ、指の間から垂らしている。「つるんってした！」と口々に言っている。



* まず保育者が手にすくって見せる。

* 手から垂らしてトロトロした様子をよく見られるようにした。

* 興味のありそうな T 児の手に乗せてみる。

絵本で見る白い卵とは結びつかなかったようである。卵に実際に触れることで、水の中をフワフワ漂っている物がトロトロしていることがわかった。もうしばらくカエルの卵であることは知らせず、期待をもたせよう。

2cm程のオタマジャクシを見て変化に気付く

飼育ケースを覗いていた O 児が、「これ、なあに？」と聞く。

保「何だと思う？」

Y 児「トット（魚）じゃない？」

O 児「魚があー」と二人で顔を見合わせ納得している。

保「オタマジャクシだよ」と言うと、

T 児「オタマジャクシの赤ちゃん！」と嬉しそう。

保「大きくなったら何になるのかな？」

T 児「おおっきなオタマジャクシ！」と答える。



* O 児の気付きで、数名の子と飼育ケースを覗く。

* 子どもたちの発見を待つようにする。

動かなかった物が姿を変え、泳ぐようになったことで魚と考えたことがわかった。

* オタマジャクシであることをここで初めて知らせてみた。

卵から出てきた小さな生き物は赤ちゃんだという2歳児なりの発想が感じられた。

この形のまま大きくなると考えているので、今後の変化の気付きが楽しみである。

考察

黒い粒だった卵が姿を変え、オタマジャクシの形になって泳ぎ始めた。その変化に子どもたちは気付き、興味をもった。オタマジャクシの泳ぐ姿が魚に似ていることから「トット（魚）」という言葉で表現する。オタマジャクシであることを知らせると、「オタマジャクシの赤ちゃん」と反応し、大きくなったら「おおっきなオタマジャクシ！」と、成長を大小で捉えていることがわかった。オタマジャクシがカエルになることはまだ知らないで、イメージを楽しませたり、変化に期待がもてるようにしたりする。

みどころ

初めて出会ったカエルの卵やオタマジャクシですが、2歳児なりに知っている知識を総動員して、気付いたことや感じたことを言葉に表しています。そして、先生や友達の発した言葉からも新たな情報を得たり刺激を受けたりして、また自分なりに考えます。知りたがりやの欲求から発する「これ、なあに？」に丁寧に応えることで、子どもの好奇心は膨らみ、実体験を伴った「科学する心」の芽生えにつながります。